

水牛通信

VOL.4 NO.3
毎月1回・10日発行
定価200円

人はたがやす 水牛はたがやす 稲は音もなく育つ

カラワン回想録②—解放区でのカラワン

ウイラサク・スントンシー 2

水牛楽団のページ 14

水牛音楽教室のおしらせ 15

サンパウロのスラムのなかで

モトムラ・ノブコさんにきく 16

ベラウの海と人 松原明美 23

他人の物語と自分の物語 津野海太郎 28

「カラワン」回想録②—解放区でのカラワン

ウィラサク・スントンシー

莊司和子訳

一九七六年一月六日、闇夜の中、私たちを乗せた乗合用小型トラックは「独裁制」という名の道をひた走っていた。私たちの車の前後をコンケン大学学生バンド「黄色い鳥」のメンバ―たちがオートバイで護衛してくれていた。彼らは危険地域を無事脱したところで、私たちに手をふって帰って行った。

私たちはすべての危険な場所を無事通り抜けて、夜中の二時頃ルイ県ルイ市に着き、そこで腹をいっぱいにし、一人一箱か二箱のタバコを買って再び出発した。深い霧で道路がまるで見えなかったので、運転手は車の外へ首を突き出して見なければならなかった。約二時間ほどで車は左へ折れて、でこぼこ道に入った。そのまま進んで森につきあたって

道のなくなるところまで来てから、私たちが案内してきた人が、とある一軒の農夫の小屋に私たちを連れて行ったのだった。この小屋は部落の他の家からは大部離れていたもので、どんなにいい目でも見える心配はなかった。

翌日の早朝この小屋の持主は私たちに御飯を炊いて鶏や魚を煮て食べさせると、この辺の農夫たちがやって来て顔を合わせることにならないうちに、森に連れて行って、私たちが日中は身をひそめているようにとりはからした。夜になるとまた戻ってきて小屋で寝るのだった。私たちはこのようにして三日間を過ぎた。最後の晩は小屋の後の竹やぶで寝ていたが、夜中になって犬が吠えるので私たちは、「森の人(コン・パー)」が迎えに来たの

であるかと察した。まず私たちの前に現われたのは女性兵士で、縦横ともに大柄でM16銃を握っていた。彼女は近づいてくると私たちと握手であいさつを交わした。「ゴームチャイ」薬団のモットは思わず声をあげた。「ピエー、女性でこの大ききじゃ、男ならどうなっちゃうだろう」と、言い終らないうちに緑色の軍服を着たやせた小柄の男が近づいてきて私たちにあいさつしたので、私たちは笑いをこらえきれなかった。彼は荷物をまとめて出発の用意をするようにと言った。私たちを迎えにきてくれたのは女性一人と男四人ほどのグループだった。最初の晩は隠密行で靴をぬいで歩かねばならなかったし、話し声をたててもいけなかった。一番きつかったのはタバ

コを禁じられたことだった。シャツも白や明るい色のものをぬいで暗い色のものに替えた。道路を通る時がもっともどきどきした時である。月夜の晩はあまり緊張しないで気を取らしていられた。目的地に着く前に、スアモーブの藪のトンネルを通り抜けねばならなかった。それはうまく目隠しになっていたが、腰をかかめて入らねばならない。私たちは髪を長くしていたのでずつと頭を下げたままでも通らねばならなかった。ようやく泊まる所に着くと、私たちが先導してきたやせた小柄な人は、ハンモックから起き上ってきた森の兵士に言った。「新しい同志が着いた。歓迎してほしい」この言葉が終るか終らないうちに男も女も一斉に出てきて私たちの手をとって歓迎してくれた。

朝は夜明け方に起床だった。ここに私たちより前からいる人の話だと、今いるところは「タップ」(小屋)と呼ばれる仮設拠点で、いつでも移動できることである。つまりここでの仕事はすむか、「シアラップ」(秘密がある)すなわち農民に見つかったり音を聞きつけられたりした際には、急ぎよ移動しなければならぬのである。それであかりや音には細心の注意を払わねばならなかった。

はじめのうち私たちは一日三回食事をしてきたが、他の同志たちが朝夕二回しか食事をしていないのを見て心苦しく思い、私たちも同じにすることに決めた。二、三日するそこで集会が開かれた。人は少なかった。彼らは私たちに一月六日に起こったことを語ってくれるようにというのだった。私たちがだれもその日バンコクにいなかったので、十分な説明をすることはできなかったにもかかわらず、彼らの涙をさそい、野火の如く燃えあがる憤怒に火をつけたのだった。ただしこの場所が人家から十分離れた場所とはいえなかった。だから大きな声を出すということはなかっただけである。

空き時間には政治学習が始まった。いわゆる民族民主革命についてである。それから森へ連れていかれると隠してある銃を取り出して、銃の組み立てから、立って撃つ、坐って撃つ、伏せて撃つといった基本姿勢の練習から始めた。私たちに渡された銃は古いしろものでカールバインとかイートゥープ(PLMB 89)といった。この最初の拠点での滞在は短いいもので、私たちは間もなくまた夜の行軍に出発した。今度は兵士としての訓練でもあり、それまでと違ったことは寝る場所を自分たち

で作らねばならないことだった。家を建てるのではない。屋根といつても木と木の間をひもでつなぎ、ゴム製の布をその上からかぶせるのである。その布の四つの角にも細いひもがつけてあり、それぞれを近くの枝に結んで張ればこれで切妻屋根の出来上りとなる。ベッド用にはテトロンかもう少し厚い布なら一〇〇パーセントのウエスポイズでもよい。人によつては傘用の布地が軽くて薄くて良いともいう。端を二〜三インチ縫っておく。ナイロン綱またはパラシュート用綱で布の両端を縫い、その綱の両端は体重に耐えられそうな木に結びつけるのである。ましがつてもバナナの木などにゆわえつけぬことだ。雨がひどい時は直径一インチくらいの木を切つて、支柱を二本立てて、雨水がハンモックに全部流れこまないようにする。私たちがハンモックで寝た最初の晩は、私たちが横になるとびりびりばりばり大きな音がして何枚ものハンモックが破けてしまった。友人が買入れてきた布地が古すぎて弱っていたので、体重の重さに耐えきれず真中から裂けたのだった。そこで私たちは自分で繕わねばならなかった。森の中で生きていくには針と糸は、ナイフとライターについて重要な生活用具である。こ

の「タップ」では水の供給に問題があった。ただ雨がまだ降っている、小さい池を掘って貯水用にした。これで水浴も飲用もまかになった。水浴の際はピドン（注1）の底を使って水を汲むのだ。飲料用にするには一度煮たててから使った。「池を」掘るときに段をつけてはあったが深く急だったので、下りるたびに皆よくすべったものである。何日かここにいる間に学生が三、四人やつてきた。男子学生も女子学生もいた。それでささやかな歓迎会をすることになった。夕方農民が犬を一匹持つてきてくれたので、私たちは生まれてはじめて犬の肉のローストしたので食べれた。解放軍の少年兵が食べようとしなかったので私たちは「おや、同志は犬の肉は食べないのかい」ときくと、彼はかぶりをふりながら、田舎訛りでこう言った。「食べるよ遠吠えするようになる」私たちは皆一瞬呪われたような気分になりあいた口がふさがらなかった。冷汗を流している者もいた。その時笑いながら一人がこう言うのだった。「食べるよ暑くなるって言ったんですよ」みんなの笑い声がよくよくひとつになつて高まった。学生たちの歓迎会は夜になつてから持たれ、まず一〇・一四の英雄たちへの追悼から始まった。パ

ンコクから来た学生たちはタマサート大学の流血事件をつぶさに語ってくれた。誰々は逮捕され、誰々は殺されたといった消息も。「ガンマチョン」楽団の女性歌手ニタヤ・ポーティカムバムルンも殺されたらしいということだった。最後に全員で「黄色い鳥」を合唱して閉会とした。

この「タップ」には二〇日聞いて、その後雨期明けを告げる大雨の中を出発した。夜行軍して昼間は身をひそめて休んだ。なんといつてもモンコン・ウトックはいたましかつた。私たちの疲労度、消耗度を比べてもだれも彼に並ぶべくもなかった。彼の足は一本だけしかなくて、あとの一本は義足だからである。森へ入る前に彼はグラドゥン山に登つて、可能性を試してきて大丈夫であると確信していたのはあったが、このあたりの山はグラドゥン山より低いとはいえ、いろいろなものが生い繁つた道なき道であり、時にはずるずるすべつたり、ぬかるみであつたりするのだ。危険を察知した時には急いで窮地を脱するたぬ走れることもある。しかし彼は走ることには不可能だった。だから私たちが止まって彼を待たねばならないことが多かった。私たちが背中にしよつた荷物は、先輩の同志たちの荷物

に比べれば軽いものだった。彼らは自分の持物の他に米とその他の必需物資をすべて背負つていたのである。ある地点では私たちは夜が明けるまでに川を渡らなければならなかったのだが、雨が降り続いたあとで岸まで水があふれており舟もみつからなくて、その夜は近くの田んぼの作業小屋で休んだ。翌朝私たちが立つて舟を待っているところを、通りがかった舟の上の人から見られてしまった。このあたりは政府軍支配地区（ホワイト・ゾーン）なので危険がいつ迫ってくるか分らなかつた。「それで舟が来ると」私たちは大急ぎで二往復して荷物ともども川を渡りきつたのだ。対岸には村があつて、この村からもできる限りはやく立ち去らねばならなかつた。なぜなら私たちのその時の力では身を護るのも不十分ならいで、とても正面から対決などできるものではなかつたからだ。それに私たちの出会つた住民がもう報告に及んでいかもしれないのだ。私たちは山すその道の人をさけながらひたすら歩いた。食事もとらずに三時間も歩いただろうか、モンコンは失神してしまつたのでハンモックに乗せて運ばねばならなくなつた。プータイ族の同志は急ぎよ近くの農家から米を分けてもらつてきて炊

いて食べさせてくれたのだった。

それから七日かかつてようやくわりと安全な地域にたどり着くことができた。目的地に近づくほど私たちの体力の方はほとんど低下した。私たちより先に着いていた学生時代からの友人（注2）がここまで出迎えにきていてくれた。この先まだ数時間歩き続けてついに私たちは人民解放軍の拠点に到達した。彼らは整列して、私たち新来者に歓迎の歌を高くらかにうたつてくれた。

我らは四方の地方より集い来たり

この山中の森で生活を共にす

故郷あとにし 溪流のほとり

ひとつの信念のもとに

この歌は私たちが目頭に熱いものを感じて聴いた最初の森の歌だった。私たちは彼らと握手を交わしながら彼らの列の前を通りぬけ五分ほどでキャンプ地に着いた。

ここはひとつの民衆工作隊のセンターにもなつていた。歓迎行事はいままでと同様だった。彼らは林や藪になつたところにかたまつて住んでいた。ブルーやピンク、黄色の屋根

が見える。つまり市場から仕入れてきたゴム布の屋根とか、洗濯した布が干してあるのだ。翌朝早く起きるとまず便所をさがしたのだが、彼らは行くべき方向を指さしたうえで穴を掘る鋤を渡してくれた。その場所へ行つてみると二尺間隔で延々と草や土が新しく掘りかえされた跡がついているのだった。

朝九時か九時半に朝食をとる前に少年兵や農民出身の若い活動家が小屋の前に集合して政治学習が始まつた。以前から解放区入りしていた学生や知識人がリーダーをつとめた。ここで教科書にしていたのは、赤い表紙の「毛沢東語録」か、彼らが「総合的真理」と呼んでいるものだった。農民出身の兵士は一般的にあまり政治学習を好まなかつた。ある者たちは意見を述べるように言われると、先生にさされて答を言われる生徒のように、「毛主席に賛成です」と答を逃げてしまうのだ。それで政治理論問題での意見の表明は、ほんの少数の弁のたつ人間の独壇場となつていった。そしてこのことは、宣伝によつて人びとの心を容易に操作できる情況ともいえた。

その日の夜は最初の日よりももう少し正式な「新しい同志」の歓迎式が行なわれた。広場には薪用の竹が束ねて置いてあつた。夕食

がすんだ後で式が始まつた。竹の竿にハンモック用の布を張つたものが幕である。幕の真中にはスローガンが二枚の赤旗とともにはりつけてある。一枚の旗は星、もう一枚はハンマーと鎌である。式は党の旗と解放軍の旗に敬意を表すことから始められた。それに続いて一〇・一四一〇・六の英雄および人民戦争のさなかに命を落とした無名の英雄たちに哀悼が奉げられた。そのあとはこの地域の指導的機関の代表者の歓迎演説が続いた。内容は、生命を奉げた英雄を賞讃しそれに続けということ、武装闘争への参加を歓迎しこれが唯一の「正しい道」である、と述べた後、CPT（タイ共産党）の栄光を讃えたものだ。

曰く、党の方針が正しかったことは明々白々であり、故に多数の参加者を得てきた。無から有へ、弱者から強者へと今日まで成長をとげてきたのである。それから都市にいる人間も含めて名ざして修正主義と日和見主義を攻撃し、ソ連の考え方をフルシチョフ以来修正主義であると非難し、国際情勢の分析に入つて、インドシナでのアメリカの敗北と地位の低下について述べたあと、国際情勢を分析して、タニン内閣がもちこたえられないのは明白である、という。そして最後に「既成の公

も待たないうちに都市からの学生や知識人の一団が到着した。私の記憶ではウィチャイ・バムルリットとスカンヤー・パタナパイブがいつしよにいた。その中に一人長いもじやもじやのあごひげをはやしたシータウ(注3)という男がいて、私にグルントーン(タバコの名前)を一本差し出した。私たちはとても話が合った。彼の最後の職業は影絵芝居の巡業で、ちょうど一〇月六日の事件のさ中、彼は影絵で政府批判をやつていて逮捕されようになり、森へ逃げてきたのだった。それ以前に彼がやつたことのある仕事は数えきれないほどある。かえるをとつて売ったり、漁師をやったり、徴兵されて兵士になったこともある。投獄されたことは一回以上になる。一般的にいつて、CPTは個人的な話、たとえば家はどこにあるとか、名前とか、以前の仕事とか、誰とつながりがあったかなどについて話すことを許さなかつた。CPT指導下で森の生活に入った者は、自分の名前をまるつきり変えなければならなかつた。一〇・六以降森に入つてきた学生や知識人についていえば、政治思想と関係のあるものか、「太陽を象徴するようなもの」たとえば、ラウイー、タワン(太陽)、ウタイ(日の出)、セーン(光

など、または「たたかひのあり様を表わすようなもの」たとえば、ムン(意志)、ブツク(拓く)、ハーン(勇氣)、グララー(雄々しい)、武器と関係ある名前、たとえば、アーカー(AK)、ラプート(爆弾)など、もしくは「山とか重々しく安定感を感じさせるもの」、たとえばプー(山)、ヨート(頂)、シラー(石)、マンコン(安定)などといった名前をつけることになった。農民たちでどんな名前にしたらいいか思いつかない者は「毛語録」を開いて、カティ(格言)、ウイジャン(批評)、ウイパーク(批判)、プラーサイ(あいさつ)などという言葉をとつては名前にした。インディアなど国の名前をつけたものまでいたのだ(ひよつとするとインドの映画やインドの音楽が好きだったのかもかもしれない)。看護婦のある者は薬の名前に慣れていたのだ、クロフェン、とかマイシンとか名づけたりした。ある者たちは社会一般で行なわれているような普通の名前のつけ方をした。そして私たちはといえば、それとはまた違つて他の誰とも同じにならないような名前を選んだ。たとえばスラチャイは彼が家で飼つていた犬の名前をとつて自分の新しい名前にした。

ラチャイは同じ班、トングラーン・タナーとポンテプ・グラドンチャムナーンが同じ班で、モンコン・ウトックは別だつた。学習が始まる前にまず文献の準備があつた。毛沢東語録の他に「林彪を駁す」といった類の文献、それからもつとも奇天烈なものは、うすつべらな本で「毛沢東思想で鍛えられた新しい人間」というものだつた。私はこのような文献を「政治的スパーマン」と呼ぶことにした。これはほとんど全部中国で印刷されたもので、私たちの学習用にはCPTの印刷センターが騰写版刷りにしていた。毛沢東語録と比較してみれば、いずれも同じ胎から出た双生児といえるようなものだつた。

はそのつたきぎをたくさん集めておかねばならなかつた。薄い毛布しかかけるものがかつたのだから。毛布といつてもほとんどが綿布で軽くて薄物だつた。

寝る場所は班毎で、初めの頃はスラチャイといつしよだつた。軍事教練のための兵士もいつしよだつた。彼は私たちと同年輩の若者だつた。政治学習の講師の方は六、七歳年上で、彼がこの学校の校長で管理責任者でもあつた。学校のプログラムは一日以内で終了するようになつていた。朝は五時半に小鳥の声で起床。約一〇分かそれ以内で身仕度して整列して体操する。私のように早起きが苦手な者もいた。もつとゆつくり寝ていた方が力が出る感じだつた。私たちは毎晩遅くまでパイブ(大麻用のパイブのような竹の円筒である)タバコをすつて話しこんでいたのだつた。朝はそれぞれ班毎に分かれて学習した。

なサーンの木の幹を使った。二つに割つて中をくりぬいてゲーン(スープやカレー類)やナムプリック(唐辛子や魚で作るタレ類)を入れるのである。非常によく食べた料理にポーンバクフンというのがある。どんなものかというと、パイブを煮て唐辛子と塩(ラードもナムプラー||魚醬||もなかつた)をまぜ、水をたしてよく煮たものにもち米をつけて食べるのである。もう一つは魚のかんづめ入りパイブのゲーンである。主な材料はまず水がメイン、その次がパイブ、魚のかんづめは最後である。食事が一日二回という習慣に慣れない者は、たいていもち米のいぶしたものの(カーウ・ジー)をかくして持つてきた。蜂の巣くらい大きいを持つてくる者もいた。政治学習で強調されることは階級闘争と革命の話だつた。なんといつても重要なのは「党について」である。社会の分析についてはだれも真剣に話さなかつた。CPTは毛沢東主義がすべてについて真理であるとみなしていたからかもしれない。この政治学校には「苦難を物語る」という慣習があつた。その日は冗談を言つたり、大声で話したり笑つたり、歌をうたつたりにつこりしてもいけなかつた。なぜなら階級について学んでいるところだからである。

まず各班毎で語り合い、それからその班でもつともつらい経験をした者が全員の前で話すのである。いずれにせよ、彼らはこの地区でもつとも「悲惨な人間」といつてのを見つけてくる。そして「階級愛にめざめた人間」と呼ぶ。この日の食事は「苦難の食事」といつて、米にバナナの木のしんをまぜてたい味ののないもので、これを食べた者は涙とともに階級的苦難を決して忘れないうた。けれども貧しい農民たちはこれを喜ばなかつた。なぜなら彼らはもうすでに十分つらい生活を味わつてきたと考へていたのだから。時には苦い味をつけるために、キニーネを入れてあることまであつた。週一日二日は米の運搬と野菜や魚をとるための休みがあつた。学習を終了すると終了式があり、余興もあつた。これには他の機構や軍隊からも出席者があつた。学生たちはリケイ、ラコン、ラムタットなどいろいろなスタイルの芝居を見せた。スラチャイが演出した新しいスタイルの芝居もあつた。話の内容はほとんど一〇・六を扱つていた。

九時には全員そろつて食事をする。食卓は立たい腰の高さで竹でできていた。食事は立つたままです。いつでも戦闘に出られる態勢にあるためだ。厳格に考へている者は食事の中も銃を肩からかけたままだつた。ここにはどんぶりや皿はない。ゴム布を広げてその上にもち米を置く。どんぶりの代わりには大き

なサーンの木の幹を使った。二つに割つて中をくりぬいてゲーン(スープやカレー類)やナムプリック(唐辛子や魚で作るタレ類)を入れるのである。非常によく食べた料理にポーンバクフンというのがある。どんなものかというと、パイブを煮て唐辛子と塩(ラードもナムプラー||魚醬||もなかつた)をまぜ、水をたしてよく煮たものにもち米をつけて食べるのである。もう一つは魚のかんづめ入りパイブのゲーンである。主な材料はまず水がメイン、その次がパイブ、魚のかんづめは最後である。食事が一日二回という習慣に慣れない者は、たいていもち米のいぶしたものの(カーウ・ジー)をかくして持つてきた。蜂の巣くらい大きいを持つてくる者もいた。政治学習で強調されることは階級闘争と革命の話だつた。なんといつても重要なのは「党について」である。社会の分析についてはだれも真剣に話さなかつた。CPTは毛沢東主義がすべてについて真理であるとみなしていたからかもしれない。この政治学校には「苦難を物語る」という慣習があつた。その日は冗談を言つたり、大声で話したり笑つたり、歌をうたつたりにつこりしてもいけなかつた。なぜなら階級について学んでいるところだからである。

「女性戦士(ナックロッパ・イン)」という劇団が一つあつた。武器をとつて

踊るバレエのようなものだ。芸術性という点からいえば、まだあまり高度なものとはいえないしろものだった。私たちは楽器を持ってきていなかったが、ピン（東北タイの弦楽器）が一つあったのでラム・ウォンをうたうことくらいはできた。

ここを卒業した後それぞれがどのような隊に配属されることになるか分らなかったのだが、最終日にその発表があった。私たちもついにばらばらになるわけだ。トングラーンとポンテーブは中央軍に、ストラチャイは地方軍に配属された。私とモンコンは引き続き学校をやつていくための講師グループに入れられた。私たちの生活もそれぞれの任務と任地により変わっていく。私たちのいた政治学校では二回生が入つて来た。モンコンは少年たちに政治を教えることになった。私は職業学校生と農民の子どもたちを教えることになった。こうしてそれぞれに人間関係がひろがっていった。ストラチャイはゲリラ部隊の一つに入れられたのだが、ほとんどが一五、六歳以下の少年たちで、指揮官がやさしい人だったので大変な腕白ぶりだったという。私ははじめて病気がかかった。赤痢だった。

私は兵役を逃がっているという非難を受けた。

きはしない。私たちは友を求め、理解してくれることを望んでいるのだ。それで学習や批評や自己批判のやり方は速成の感をまぬがれなかった。心をこめてやつていないのだからどれだけ根づいたか分つたものではない。一定期間の練習を経て八月七日がやつてきた。歌のバックでダンスを見せるやり方を採用するようにすすめたのは私だった。彼らの踊りはうまかつたし、品位が落ちるようなものではなかつたので、私は見苦しいとは思っていなかった。けれどもこれは旧社会のファッションであるど批判されてしまった。ところが彼らのラムブルーン（注カ）ではダンスを見せるのである。これについてはだれも何も言わなかつた。教宣になるようなことは党の執行部の各段階で一切監督した。弱点をとりあげて発表することはいけないとされた。軍全体が欠点だらけであるような印象を与えるからであるという。司令のみがあつて反論は許されない。この時の行事以降私は政治儀式には一切加わらなかつた。演奏がある時以外は与えられた任務を忠実に果たした。私はまた髪をのばし、ジーンズをはくことにした。どんな重要な党の行事の時にでも、である。私の中の反抗心と探究心が再び頭をもちあ

幹部の医者もそれを証明した。それ以来私と彼らは出会つても顔を見合わなくなつた。私たちは新たに小屋を建てた。私とナウインがはじめに行つた。雨が激しく降っている中で、ナウインは竹を切り倒して小屋を作つた。私は穴を掘つて竹を運んだだけである。この頃ストラチャイの奥さんとポンテーブの奥さんがやつてきたので、彼らも別々の小屋に住むようになった。モンコンとトングラーンも私の小屋のすぐそばに小屋を作つた。それでここは音楽の練習センターと化した。ちょうど八月になるころで雨がひどかつたので、皆歌を作る余裕が十分できたのだ。私はしかし一曲も作らなかつた。詩をひとつ書いたがそれもなくなつてしまつた。この時書かれた歌はほとんどが既成の公式（スト・サムレト）にとらわれた作品だった。その中で最ももだつた歌はモンコンの作つた「ローンパーブン（注4）」だが、党幹部は機密保持に問題があるとして放送を許可しなかつた。モンコンのもうひとつの歌「街（ムアン・ルイ）」も同様の扱いを受けた。この頃楽団はメンバーがふえていた。ピンを弾くナウインとケー（笙）を吹くガックである。それから地方の音楽とモーラムをうたう時にはサラが歌手

げ始めた。ストラチャイはといえば、彼もうかぬ様子をしてた。彼は毎日動物を追つてた。そしてだれともつき合おうとしなかつた。あげくのはては腸チフスにかかり、目だつてやせていった。その頃の私たちは歌の練習も思うにまかせなかつた。ストラチャイが治つてもなく今度は私がマラリアになつてしまつたのだ。演奏する時には支えてもらつてやつと立ち上がる有様だった。

一〇月に入ると私たちは北部へ移動するという知らせを受ける。この地区のCPTが送別会を開いてくれたが、以前私と対立した執行部は参加しなかつた。私の心はますます彼らから離れていった。一〇月一四日には記念集會が開かれたが、この時には私たちが遠くへ移動することが確実となつてた。ストラチャイはそれで新しい歌「赤い太陽の下の長い旅路（ドゥーンタン・グライ・タイ・タワシンデー）」を作つた。彼は幸せな時つらい時を問わず、たえず歌を作つていられるのだ。たとえどんな状態にあつても、心がおもむくままに歌にすることができた。モンコンは義足をやめて松葉杖を使うようになったので、前より速く歩けるようになった。この時の集會を最後に何人も友人たちとわかれなければ

として参加した。かつて抜きん出ていたストラチャイの役割は少し分少なくなつてきた。地方の音楽を演奏することがふえ、彼はこの方面はあまり得意としていなかったのである。党が次に指示してきた学習は「党の八大注意について」だった。しかしだれもあまり興味をしめさなかつたし、うんざりして動物狩りに行つてしまつた者も多い。ストラチャイはとくにそうだった。彼は演奏でも自分の作つた曲の時以外はあまりすることがなかつた。八月七日（注オ）、すなわち党の創立記念日に次ぐ重要な記念日が近づくと、この日のために皆が歌を作り、毎日練習に励んでいた。けれども私たち自身の友情にはひびが入り始めたのである。ひとつには党の執行部が規律にこ

だわりすぎるからでもあつた。毎日歌の練習をするのだが、歌手と曲の演奏を合わせるのが一苦労なのだ。私のように楽団を結成することに反対だつた者も、実際にだんになれば手伝わなければならなかつた。身体を使う仕事ではないから疲れたとはいえなくても、非常に神経がはりつめていた。しかし党はいつても、「政治思想」という魔法のランプのような万能薬を持つてきて私たちに飲ませるのである。実際はすべてを治すことなどで

ばならなかつたが、私たちが遠くへ出発することを知つている者はごく少数だった。秘密にされていたのだ。集會のあと私たちはこの地区の司令センターである「タツプ」に戻つた。この地区の軍事面での責任者がいっしょだつた。道に迷つてしまつたので着いたのは夜七時過ぎになつた。モンコンは後のグループにいたのだが、私たちが見つからず、あまりにも長いこと飲まず食わずで歩いたのでまた気を失つてしまつた。彼は空腹になりすぎると倒れることがあつた。

ここに二日ほど泊つた後、約三日の道のりの次の地区へ向けて出発した。荷物はどうしても必要なものだけにしぼつた。衣類を入れるパーロー（注五）とギターである。私はそれにモンコンの義足をギターに結えつけてかついだ。彼には荷物を持たせないようにしていた。山菜とりやゴムの木をさがしに分け入つて来る農民に姿を見られないように歩かねばならなかつた。私たちの前には前衛部隊が先導していた。今回ははじめて森に入つてきた時と違つて米の袋を各自が持つた。二、三日分の米を入れた細長い袋で、肩からぶら下げるのである。この時通つたところは今までより大部高く上つたので景色が大変すば

らしかった。着いた地区は私たちがそれまでに行つたことのあるどの地区とも違つていた。着いてしばらく休むと最初の日の夕方にはもう公演することになった。ここはいろいろな作業班とゲリラ部隊が集まつて任務の総括をし、戦闘訓練をしていたので人口が多かつた。私たちが着いてすぐ米が底をついてしまつたので、実りすぎのとうもろこしを一晚中ゆで「グリーン・タレー」(水ばかりの中にバナナの幹のしんが少しばかり浮いているもの。バナナの木もほとんど食べ尽くしてしまつていた)といつしよに食べた。コシヨに似た香りのする木の皮が香料として入つていた。これを一日に二食するのである。三回小便すれば空っぽになつてしまふ、とある者が言つた。森でさがしてくる食べ物には猿の他に野ねずみがあつた。川の魚をとるのはむずかしくなつて来た。人が多いのとずつといふせいである。大変な生活だつたが夜は楽しかつた。レックという女性歌手は兵士慰問の歌をうたい続け、声がかれてしまつた。私たちはここでは休養をとつていてよかつたので、森へ入つては動物をとつた。ある時私とトングラーン、スラチャイそれに年輩の戦士とである木の下で寝ていた。その木の実はいくつか(注キ)が

好んで食べるものだつたが、その夜その同志は日除け猿を一匹撃ち落とすとした。これをあぶり焼きにしてとうもろこしと食べたが、実にはうまかつた。その翌日はそれぞれ別々の方向に行き、私は手が猿を一匹見つけたのだが、非常に高いところにて待てど暮せど下りてこないのである。それでしびれをきらして撃つたが当らなかつた。スラチャイも何もとれずに帰つて来た。以前彼はやせざるを撃ち落とすとしたことがあるが、死んでいなかったのので追いかけて首をしめて殺したのだつた。一度に鳥を三羽も撃つて私が唐辛子のためにしたことであつた。この日はトングラーンが小さい手が猿を一匹撃ち落とす私がかついで帰つた。何もとれなくて、ひきがえるを七、八匹つかまえて帰つたこともある。ちようど出会つた農民(注ク)がもち米とブララー(注ケ)を分けてくれた。この時ほど米のありがたみをかみしめたことはない。

私たちが再び出発する際に、私、スラチャイ、トングラーン、ポンテーブと別の隊の兵士たちとでこつそり夜村へ入つて買物をした。ずいぶん危険なことをしたものだ。私たちの方にも戦力はあつたのだが敵側との遭遇はなかつた。買忘れなければならないのはタバコと甘

いものである。農民の一人は銭別にと、私に米と大麻の包みを渡してくれた。その夜私たちは一晩中歩き続け、夜も明けかける頃ようやく休むことができた。私たちが森に入つてちようど一年が経過して来た。私とスラチャイは、たいいてい近くにハンモックをつつて寝た。私が一人でハンモックをゆらゆらさせながら横になっている時に、彼は私の耳もとでギターを鳴らしていたものだ。それでできた歌が、「ゲリラ部隊の夜明け」である。このころは私たちカラワンのメンバーだけで歌の練習をしていた。それでかつてのカラワンの演奏スタイルを思い出して懐しく思つた。あのころのテーブを持つてこられなくて残念だつた。このころ作つた歌でまだ知られていない歌のひとつに「赤い太陽の下の長い旅路」がある。この歌は一人ずつが独立してひくことのできるものだ。

今度の部隊の兵士たちとは大変親しくなつた。私が親しくなつたのはまだ一六歳で、以前はバスの車掌をしていたのだという。なぜか皆からあまり理解されていなかった。私たちはそれぞれのグループから離れて近くで寝ることにした。彼は私に寝床を作つてくれて、私たちは毎晩ゆでとうもろこしをかじりなが

ら遅くまで語り合つたものだ。党はいかかわらず情勢は優勢であると発表していた。

ここにもそれほど長くはとどまらずまた出発しなければならなかつた。私たちの身うち女性隊がやつてきた時には、党は部隊によつて私たちを監督させた。再びわかる時には、涙と別れを惜しむ声とが満ちあふれ、いつまでも耳をはなれなかつた。私たちが道を急いでいたが、休みもとらなければならぬのでけつこう時間をとられた。谷をわたり野を越えるまでも二日を要していたし、細心の注意をはらふ必要があつた。他のグループがすでに見つかつたことがあつたのである。ついに最後の危険地区も通過し終えた。メコン河が近づいてくるにつれて、私たちの胸も次第に高鳴るのだつた。歩く時は一列縦隊だつたから、先頭からの命令が途中で違つて伝えられることもあつた。最後の部分では道路を歩いていて、車の来る音がきこえたので、まるで砂漠の盗賊のように一斉に走つた。そしてついにメコン河畔に立つたのだつた。メコン河は肩車で舟まで行つた。私たちを迎えにきていたのはラオス軍のサンパンだつた。政府軍の連隊駐屯地二カ所の間を通つて行くのだ。舟を出すまでに相当の時間をとつてし

まつた。メコンの流れは激しく岩が多い。私たちの舟は大きな岩のひとつにあわやぶつかりそうになり大波をかぶつたが、なんとか方向を変えることができた。月夜だつた。この夜私たちがメコン河を渡りきつた。そこから車でひた走つた。流れのうずまき淵や、返す波がずつと見えていた。

(5) パーロー ベトナム語でリュックサックか背のうのこと。

原注

(1) ビドン ベトナム語で水筒のこと。底を多目的に利用する。食べ物や盛るどんぶりのかわりに用いたり、香辛料をつぶす石臼のかわりにもなり、水浴用の水汲桶のかわりもつとめる。

(2) 学生時代からの友人 ナコン・インタニンのこと。一〇・一四革命当時の学生運動指導者。彼は一九七八年初頭待伏せ攻撃のさ

中戦死した。ここに哀悼の意を奉げたい。

(3) シータウ 彼も待伏せ攻撃の際に命を落とした。ここに哀悼の意を奉げた。

(4) ローンパーブン ウドンタニ県内の村の名前で一九七四、五年ごろ政府軍側に全村焼打ちされた。

(ア) 「既成の公式(スト・サムレト)」

解放区から戻つてきた人々を中心に最近よく使われるようになった言葉で、日本語ではドグマとかステレオ・タイプと呼ばれるようなことがらに対して使う。

(イ) ラム・ウォン 男女がベアになつて輪になつて踊るタイのフォーク・ダンス。

(ウ) グラルム 片面の太鼓。

(エ) ラム・ラオ ラオ(ラオス)式のラム・ウォン。モーラムは東北タイ調の歌謡でやはりラム・ウォンを踊る。

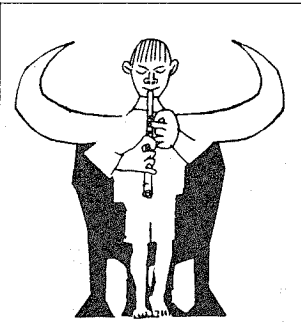
(オ) 八月七日 一九六五年八月七日最初の武争闘争を記念する日。

(カ) ラムブルーン ラム・ウォンのための歌謡のひとつ。

(キ) 日除け猿 Flying Lemur ももんが、むさびに似ていて木の枝から枝へ飛びまわる。

(ク) 農民 タイ語はモアンチヨンで解放区内の農民(人民)をさす。

(ケ) ブララー 熟鮭のようなもの。川魚を米と塩でつけこんだもの。



水牛楽団のページ

二月二十日にタイからモンコン・ウトクがやってきた。それから毎日のようにカラワン楽団の歌やジット・プミサクの歌の練習。水牛楽団はじまって以来こんなに練習をしたことはなかった。八時間もやってた日もある。片言のタイ語と身ぶりだけでいっしょにくらす日。かれのピン（タイ東北部の三弦の楽器）と歌にいつもの編成で二月二十六日（金）に「バンコクの不正琴」（中野文化センター）。

三月六日（土）日本音楽協議会の「はたらくもの音楽祭」のなかで、「音楽のひろば」として、ポーランドの歌、林光の第2ピアノソナタ「木々について」、プレヒト・アイスラーの「おふくろ」。共演は水木陽子、竹田恵子。七日（日）には「大音楽会」でポーランドの歌と、モンコン・ウトクといっしょにタイの歌。

三月六日（土）、NHK・FMの三時間ドラマ「シヨバン」のなかで、ポーランドの歌を何曲か演奏。
三月十五日（月）、NHK・FMのラジオドラマ「家族の声」の音楽。主演、沢田研二。
三月十九日（金）、日比谷公会堂六時半。「境界線上のメッセージ」。共演は加藤登紀子と坂本龍一。
三月二十七日（土）、日仏会館二時半。「国について・歌について」コンサート。主催は「国歌を考える会」。出演は林光、小室等、水牛楽団、高史明、田中克彦。
三月三十一日「みなと」コンサート。身近でたのしい音楽会、中野駅南口の喫茶店みなと、午後八時。ギターの丸山真治と、林光十

水牛楽団。食券つき二千円。
そのほか土本典昭の映画「南からこんにちわ」の主題歌を作曲録音する予定。
四月十日（土）、新座市の武蔵野文化センター（東上線志木）でポーランド音楽祭に参加。六時から二時間半。共演は水木陽子。六時前にペンデレツキの音楽についての映画が上映される。
四月十八日（日）、西武スタジアム二〇〇。プレヒトの詩「時代錯誤の行列」についてのシンポジウムに福山敦夫（歌）、高橋悠治（ピアノ）、吉原すみれ（打楽器）がパウエル・デッサウがその詩に作曲した作品を演奏する。
四月二十四日（土）、宇都宮「仮面館」七時。ポーランドの歌など。
五月十二日（水）、水牛音楽教室をはじめ。くわしくは次のページ。
五月十七日（月）、中野文化センター、七時。「光州5月」。ゲストは林光、高橋アキほか。地下出版された韓国抵抗歌集を中心に、尹伊桑の「歌集」、林光の「光州5月」、高橋悠治の「高銀詩集」。六時半から映画「自由光州」を上映する。協議は韓民族。

水牛音楽教室

人々のくらしのなかから生まれ、ひそかに歌いつがれる生きるためのたたかひの歌、これらの歌に耳を傾け、口ずさみ、学ぶ、そこから私たちの生活を考えなおす。

第1期テーマ

- 5月12・13日—①序論「アジアのいなかの音楽」 高橋悠治
- 19・20日—②タイ「生きるための歌」 福山敦夫
- 26・27日—③プレヒトと3人の作曲家たち 高橋悠治
- 6月2・3日—④チリ「新しい歌」運動 福山敦夫
- 9・10日—⑤ “ (2) “
- 16・17日—⑥楽器(1) 水牛楽団
- 23・24日—⑦ポーランド「禁じられた歌」 福山敦夫
- 30日・7月1日—⑧韓国の抵抗歌 福山敦夫
- 7・8日—⑨楽器(2) 水牛楽団
- 14・15日—⑩音楽と民衆運動 高橋悠治

ところ イメージ・フォーラム 四谷3丁目駅前・不動産会館ビル6F ☎357-8023
とき 5月12日—7月15日 水6:30—8:30 / 木10:30—12:30
授講料17,000円 資料代を含む
問い合わせ 水牛楽団 ☎425-9658, 398-1572

カセット ポーランド 禁じられた歌

- A面 ポーランド国歌（ピアノ演奏）
しだれ柳
今日は会えない
秋の雨
モンテカシノの赤い芥子
埋められた武器の子守歌
明日はワルシャワ
祖国との別れ（オギンスキ）
ポーランド式料理のつくりかた
娘にあたえる歌
ヤネク・ヴィシニエフスキは死んだ
革命（シヨバン）
百年
- B面
祖國との別れ（オギンスキ）
ポーランド式料理のつくりかた
娘にあたえる歌
ヤネク・ヴィシニエフスキは死んだ
革命（シヨバン）
百年

水牛楽団 水木陽子 林光
高橋アキ 津野海太郎
定価二千円 送料二百四十円
申込みは編集委員会まで

サンパウロのスラムのなかで

モトムラ・ノブコさんにきく

モトムラさんが待ちあわせの時間におくられた。待ちびと、きたらず。そんなときブラジルの人たちは、なにをやっているのかという話になった。同席してもらった楠原彰さんによれば「アフリカではね、たとえばバスの停留所なんかで何時間も待つとき、

知らない人たちがあつまってきた、飲めや歌えの酒盛りになっちゃう」のだそうである。「つぎは自分が待たせる番になるかもしれないから、イライラしないで待ってる」と、沖繩の友人がいつていた。

——ブラジル人もなにもしないでしょうね。みんな空をみて、ああ、きょうは空がきれい

ね、きょうは月があるねとかいつて……でも、すごいいい気持ちですよ。ハハハ。

彼女は生まれてすぐ、家族といっしょにブラジルに渡った。若い一世である。

——大学のとき、クラスで本を読んで、セミナーをやらなくちゃならないのね。それをお芝居でやったりしたから、大学のなかにたくさん演劇のグループがあるの。パウロ・フレイレやアウグスト・ポアールの考えにちかいかい。反対しなくちゃならないことがあると、それを演劇で見せるといふか、メッセージを演劇でつたえる。たとえば農業をやっているところ

から私の街にくれば、すごい苦労するね。そのことがひとをどれくらい抑圧しているのか……。

たしか大学のなかで、八つぐらいグループがあった。ひとを集めて見せたり、スラムにいつて見せるグループもあるの。

それから「生きている眼」という名前の、ポアールの方法でやっている有名なグループもいてね、ニカラグワにいつたり、すごい上手な人たち！ 私もやつたけど、ちよつとの時間だけ。ただ大学じゃなくて、パペーラにいつて……パペーラって知ってるかな？

スラムでしよう？

芝居をつくらうかといつたら、子どもたちは

「わかんない」——じゃあ、みんな大きくなつたらなになりになりたいときくと、すぐに「あたしはタイピストになりたい」——タイピストって人気があるのね、ハハハ。

「わたしは庭師」

「壁にペンキを塗る人」

「わたしは掃除をする人」

と、みんな自分でできたのね。それで、じゃあ、そのぜんぶがでてくる物語をつくりましょうか、と。

私はなにもいわない。子どもたちが自分をつくるんだけど、ホントにうまいの。「あたしがオフィスにはいつていく」と、タイピストになりたい子がいつて、「社長はあそこに坐りな」——社長が坐るのね。そしたら別の子が「ぼくは酔っぱらいになる」といつて、酔っぱらってオフィスにはいつてくるの。オモシロイ！「なんと思っているの、もうここで働かなくてもいい！」と社長がどなると、「ほかに働くところがない、我慢して」と酔っぱらいがいつたりね、ほんとにおもしろい。で、私は、

「チヨ、チヨ、チヨット待つて。いま書く

——そう。でも私のはたらいでいたスラムは、日本のスラムとはちよつとちがう。子どもたちがたくさんいるの。その子どもたちが半日は学校にいつて、あとの半日、いくところがないから、私たちのプロジェクトにきていた。そこでいろいろ活動したり、遊んだりしていったんだけど、そのなかの大きい子どもたち——十二歳ぐらいの子たちがグループになつて、自分たちの問題をいつても話しあっていたのね。

スラムにいと、あたしたち、もつと素直に、本当の気持ちになる。みんなでちいさなところにいるから、なにもかくさなくてもいいのね。きょうはあの人のお父さんがお母さんをぶつたとか、ああ、あれがあった、これがあつたといふことが、だれにでもすぐわかるでしょう。そういう毎日の問題から、なんでスラムがあるのか、なんでスラムにいるのかというようなことを、みんなでデイスカッションするの。

そうしていると、だんだん自分のシチュエーションがわかつてくるでしょう。「じゃあ、お芝居をつくつて、それをお母さんたちに見せよう」といふことになつた。どうやつてお

から……ハイッ、つぎやつて！

と、それをいそいで紙に書くの。

それからそのオフィスに電話がかかつてきて、奥ちゃんに赤ちゃんができたというのね。「ああ、また赤ちゃんができたら、もう生きられない」——そこにペンキを塗る人や掃除する人たちがきていて、その人たちがいつてのね。「あたしたちは毎日はたらいでいつているのに、あれもできない、これもできない」とか、「家に帰つたら、なんとかかんとか」とか。

みんな十二歳から十四歳ぐらいの子どもたち。男と女が半分ずつ。子どもだから、いろいろな問題を口ではいえないけど、お芝居ではいえるのね。すごい見えている。社長はどんな人か、はたらく人は毎日はたらいでも苦しいといふことを、よく知つて。でも、みんなでつくつていつるときはすごいいきましているけど、お母さんたちに見せるときはコチコチなの。ハハハ。でも、プロフェッションナルじゃないから、テクニクは大事じゃない。うまくやらなくてはいつるのが、お芝居をやる目的じゃないの。

それで芝居が終つたら？

——アイスカッションをするのね。どうしてあんなふうにやったのかとか、あれはどんな人なのかとか、あそこは別のことばにしたほうがよかったですか……。

そういう活動をふくめて、モトムラさんたちはスラムでなにをやったんですか？

——そのスラムには一万五〇〇〇人ぐらいの人がいるのね。農村で生きられなくなった人たちが町にきたら、家がない。はたらくところもない。それで、はたらきたくてもはたらけない人たちがいっしょに住みはじめただけど、いっぱい問題がでてくるの。そのため地域にコミュニティ・センターをつくったの。カトリックの教会と、それから市がお金をだして。

スラムにはいっぱい問題があるから、いっしょに反対しなくてはならないことがあると、その動きがすぐ政治化するでしょう。そうさせないために、市や教会がお金をだして、これをあげる、あれをあげると広告をする。そのためセンターなのね。

このセンターには託児所がひとつあって、三歳から六歳の子どもを、はたらいてるお母

ものを売るとか、貧乏な子どもたちの問題はたくさんあるの。

で、そういうスラムがサンパウロにはいくつくらいあるんですか？

——サンパウロには十七の区があるね。私たちの区だけで一三六のスラムがある。全人口の半分ちかくがスラムの住人なの。公式の数字は本当じゃない。これこれのものをもっていけば、もうスラムの住人じゃないことになってしまうから。ブラジルはいい国だから。ハハハ。

私たちは子どもの教育からはじめたけれども、はたらく人たちの組織をつくるのか、たくさん政治的な問題がある。でも、それをやるためにはセンターをでなくちゃならない。コミュニティ・センターは妥協によつてできているから、政治的な活動はできないようになってるの。

夜の識字教室もそう？ あんまり政治的なことじゃなくて……。

——そう。MOBLAOという大人たちにブ

さんがはたらかないお母さんにあずける。私たちのプロジェクトは、七歳から十四歳の子どもをあずかって、それで夜は大人の識字教育。だから私たちには私たちの目的がある。カトリック教会には別の目的がある。市にはまた別の目的がある。そういうふうにしてコミュニティ・センターがはじまったのね。はじめは教育というよりも、そこに食べられるし遊べる……。

私たちが責任をもっていた半日には、芸術の時間やスポーツの時間、学校の勉強の時間があつたけど、なんでも子どもたちに自分できめさせるといのが、私たちのひとつの目的だった。「ここにこういうものがある、これをつかってなにをしましょう？」といってみんなにきめさせる。たとえばね、ソルベルトがあるでしょう。

ああ、アイス・クリーム。棒のついてるやつね。冷蔵庫でつくるんだ、安い材料で。それを子どもたちに売ったりする。

——うん。水とシュガーと香料で。すぐそばにサッカー場があつて、そこにアイスクリームの棒がたくさん捨ててあるの。それをみん

ラジル語の読み書きをおしえる活動があつて、それはパウロ・フレイレの方法をつかつている。市がお金をだして、学生たちが先生になるのね。その先生のなかに、おなじ方法をつかつててもたくさんいるの。できる人もいれば、なにもしない人もいる。そんななか、ある人たちはフレイレの「意識化」の方法でやれるかなと考えはじめたのね。でも、ほんとにやれるのか。

たとえば、フレイレのやり方をそのままつかつて、識字を社会的な意識につなげていくとすると、もうそのインスティテューションのなかにはいられなくなるのね。だから向う側では、意識化のすぐまえまでやらせておいて、そこまですると先生をかえる。

私にはフレイレの方法はつかえない。やればやれると思うけど、そのためには社会のそとにでなくてはならないの。フレイレも、むかしは「意識化」によつて社会を変えることができると思ってたが、いまはちがうといつてるね。「意識化」だけでは十分じゃない。私もそう思う。

そしていちばんむずかしいのはね、政治活動になると頭だけになっちゃうの。論理だけになって、人間のこころを忘れちゃうの。私

まで拾ってくる。ほんといっぱいあるの！それで箱をつくったり、自分で考えたいものもの——私たちがみるとなにも似ていないけど、子どもにはなにかに見えるかたちをつくつたり。それからアイスカッション。このアイス・クリームにはどんな材料がはいっているか。だれがかじつたか。値段はどれくらいか。どうしてそんなに高いのか。どこで売るか……。

子どもたちははたらいてるの？

——それぞれの家庭でちがうけど、十歳くらいになると、お母さんのつくつたものを売ったり、サッカー場で自動車の交通整理をやったり、ガラクタをあつめて売ったり……そういう子どもたちは、なかなか私たちのところにはこれない。私たちのところをやめて、はたらきに行く。学校にもいけないの。だからスラムをでるチャンスがなくなる。でも、私、学校がいいっていうんじゃないけど。

女の子たちはほんとに小さいときから、お金持の家に手つだいにいって、掃除をしたり子守りをしたりするの。安い賃金で、休みもない。それから信号のところで、子どもたちが

の本当にはしい変革というのは、頭だけじゃなくて、こころの面もみなくちゃ……。五年まえから、みんなレーニンとかマルクスとかことばだけになつて、おなじ単語でみんなが別のことを考えてる。おなじ「平等」ということばをつかつて、なかみがぜんぜんちがうの。だから私は政党には入っていない。入りたくない。ほんとに人間的に考える党だったら、私も入る。

私はチェンジしたい。でも、ときどき、私たちがチェンジしたいと思つているやり方とおなじやり方をしなければ、チェンジすることとはできないといわれるのね。私は別のやり方でチェンジしたい。でも、むずかしい。できるかどうか、わからない。

「いまの大統領になつてから」と桶原さんがいう。「雪どけになつて、恩赦がはじまつたんですよ。そしていままでも国外追放された連中を、ぜんぶ国内に入れたんですよ。そしたらひとつにまとまつていた反対勢力が四分五裂しちゃつた」

——ブラジルには二つ政党があつたの。反政府の党がどんどんつよくなつてきたので、政

府が「みんなに恩赦をあげる、一つではなく四つの反対党をあげる」といって恩赦をしたら、ひとつの大きな力が四つに割れちゃったの。それで政府の側は「われわれはいい人間である。自由をあたえたから、デモクラチックな政府だ」といってるのね。私たちはずっとまえから、「これはほんとの恩赦じゃない、気を付けましょう、あぶないあぶない」といってたけど、みんな失敗してね、別れちゃったの。

そして一つのスラムのなかでも、ある政党に入った人たちが別の政党に入った人たちと喧嘩するようになってね。それで私、ほんといやになつて、日本に逃げてきちゃった。ハハハ。「あなた、逃げるんでしょ」とって、友だちにおこられた。

でも、私の友だちが手紙をくれて、私たちの区の集会をまたやっていると書いてあったのね。私たちは二年半、毎土曜日と日曜日、スラムにいつていた。二年半、自分のことはなにもしないで、そればかりやってきたのに、なんにもならなかったって、それで私、おこつたのね。でも、また集会をはじめたら、あつまつた人たちの眼が以前よりもっとよく見えるようになって、はつきりものをい

ようになつてた。みんなといっしょにいて、私たちが「ああしろ、こうしろ」といわないで、失敗してもセンチメンタルにならず、またはじめからやりなおせばいい。私たちはそう考えていたんだけど、いま、だんだんそういう状態になつてるのね。

時間と空間を確保することが、すごい大事な。私たちがとらなければ、向う側がさき

にきて、とっちゃう。たとえ託児所をつくったときでも、向う側が「私たちがお金を払つて、空間をつくりましょう。なんでも自由にものをいつていいです」といつてくる。でも、そうすればかならずあつちの考えが入ってくる。だから「この空間は私たちが確保する」と、いまいわなくちゃだめになるのね。いつも時間と喧嘩しているみたい。

スラムの人たちが、私たちは水道がほしい、電気がほしい、教育がほしいといつたら、いっぱい役人がきて、「ハイハイ、なんでもやりますよ。みなさんはなにもしないでいいですよ。ハイハイ、あたしたちがみんなしてあげますよ」というのね。だから、すごい人に見える。あまりものを考えない人たちは、ああ、これでもういいと思つちゃう。

——あんまりなにもしてない。養護施設を勉強してきたんです。家庭のなかで育つていられない子どもが養護施設にはいる——その子どもたちの教育を勉強してきたの。親たちが病気になつたり、離婚したり……。

日本でいろんなところで話すとき、あなた、困るでしょう。日本人はあんまり気持ちをそとにださないから。

——うん、困る。ブラジルの学校でね、先生が話してるとき、生徒がみんな下むいてノートとつてたら、「なんで黙つてるの。このクラスじゃあたしがスターなんだから、もつと見てください！」って、先生がおこるよ。眠たくても、こーんなに大きな眼をして見ていなくちゃならない。ハハハ。本当ですよ。

だから子どもたちも、演劇をやらせたらうまいんだね。

——日本の教育は、やさしい子、かわいい子にする教育なのね。あたしは一歳のときブラジルにいつたでしょう。だから友だちはブラ

ジル人がおおいけど、日本人の友だちもいる。でも、ぜんぜん別の日本人、日本にいる日本人とは。ひとりおもしろい友だちがいるんだけど、それはすごくオーネストな人のね。その友だちの両親もオーネストな、ほんどの人たちの。どれくらいほんとかというとな、その人のお父さんは週に二回ぐらい、魚釣りに行くの。その道具を、ある日、その家の犬がかじつちやつたのね。そしたらお父さんが「ママがちゃんとしておかなかつたら、こんなになつちやつたんだ！」

とおこつて、食器やなんかを、みんな外にすてちゃつた。そしたらお母さんも鉢うえの花をみんなぬいちゃつて、二人で泣きはじめたの。それで友だちが、家から三〇キロはなれたところで勉強をしているお兄さん呼びにいつたのね。でも、「ああ、あの二人はすぐになおる」って、きてくれなかつたんだって。案の定、夜になつたらもうなんにもなかつたみたいになつて……ハハハ。そんな人たちの。

でも、そんな人たちは日本の落語によくできてきたよ。これからの落語は、ブラジルから生まれてくるのかもしれないね。

「ブラジルの選挙ポスターでね、候補者の顔があつて、その下にこういうスローガンが書いてあるんです」と橋原さん。「あなた方は考えなくてもいい。私が考えてあげます。あなた方は見なくてもいい……」

——ハハハ。そうそう。「あなた方はいわなくともいいです。私がいつてあげます。あなた方は行動しなくてもいい。私が行動してあげます」——ね、いいでしょう。私たちはホワーツとしてればいいの。

ブラジルのスラムでは人種的な対立はないんですか？

——ない。でも、社会的にみたらあります。マジヨリティは黒い人びとだけど、大学には入れる人はすごく少ない。それでブラック・ピールが組織をつくつて、自分たちの文化を大事にしようとしてやっている。そこには白人たちはいれない。

あなたが日本にきたのは去年の六月でしょう。日本ではなにをやつてるの？

——そうそう。それはいいね。日本ではエモーションを外にだすのを抑えるから、しまつてしまつてしまつてしまうから、でるときはすごいね。暴力的になる。ブラジル人はいつでもすぐ外にだすから……。

なにもたまらない。でも、どちらかといえは明るいほうがいいな。

——そうだね。いつでも明るくできるのが、本当の芸術だと思う。演劇つておもしろいね。ブラジルにはプロフェッショナルじゃない劇団がたくさんある。プロフェッショナルじゃないからなんでもいえる。さつきいつた「生きていく眼」もそうなのね。とても古い劇団で、一九六八年にはもうあつたの。はじめは大学のなかでできて、それから外にでたのかな。農村に演劇をもつていく運動があつて、その人たちはすぐに弾圧された。検閲がきびしかつたの。プロフェッショナルになると、もうそういうことはできない。それでも、ときどきはすごくいいお芝居もある。

ふつうの農民が広場でおどつたり、お芝居

をしたりというようなことは？

——うん、あるある。作物がとれたときなんかね。インディオは……どうなのかな、よくわかんない。でも、いま私が読みおわたすごくいい本があるの。それはインディアンが自分たちでつくってきた生活のルールの本なのね。たとえば子どもが生まれるでしょう。そうするとそれはお父さんの子どもじゃなくて、お母さんの子ども。そして部落ぜんぶでいっしょに育てるのね。私、大すき、それ。日本の女もいまはあんまり力がない。でも、まえばそうじゃなかったんでしょ。

女の歴史って、すごい興味ある。いままでは男の歴史だけでしょう。えらい人っていったら、男ばかり。私の町では女の人もはたらくから、男にそんなにえはらせない。女たちの組織があつて、毎年、会議をやるの。そして男たちのアーミーと喧嘩したり、日本よりもつとおんなじ、女と男が。メキシコともちがう。メヒコはスペインに植民地化されたでしょう。ブラジルはポルトガルだから。アルゼンチンもすごい。

その差がでてきちゃったんだね。それとプ

ラック・ピーブルがおおいから——黒人は母系制だから。母親がつよいからね。大の男でも、すぐに「ママー！」って……。

——そうそう。本当にそうなの。ブラック・ピーブルは「ママー！」って泣くの。でも私の町からでたら、やっぱりまだ男のほうがつよいね。日本の女の運動はあるの？ 日本にきたとき、新聞で国際会議があるっていう記事を読んだけど、いけなかったの。それつきり。

いつまで日本にいるの？

——もうすぐ。三月二十九日まで。日本にきてからはじめて——ほんとはじめて、齡をとつたっていう気がした。日本ではみんな年齢をきくでしょう。ハハハ。日本もいいところがたくさんあるけど、電車のなかで、みんな黙って本を読んで、いっしょの顔をしているの。なんにもいわない。もう、「ああ、だれかなんかいつて！」っていいなくなるの。みんな見るけど、なにもいってくれない。みんな知らん顔してるの。関係ない。ブラジルとはぜんぜんちがう。

ベラウの海と人

せつせつせーのよいよいよい

歌を口ずさみ、掌をぶつけあい、子どもたちと遊ぶベラオの夜。こんどは少女が歌いだした。私も教えられるままに、手を動かす。

クライ ミソラノ ナガレボシ

ドコヘ ナニシニ ユクノヤラ……

そこで口をつぐむと、少女は外に眼をやり、ちように通りかかったオセンコおばさんに声をかけた。オセンコさんに助けられて、もう一度。

暗いみ空の流れ星

どこへ何しに行くのやら

林の果ての野の果てに……

「忘れちゃったねえ、あとは」

あけつばなした裏口の板の間に腰をおろしたオセンコさん。しばし遠くのほうを眺めるようなまなざしだ。

「戦争が終わってから日本人いないでしょ。三十年以上日本のことば話さないから、聞くのはわかりますけど、話すのはなんだか口にいえない」

松原明美

とことわりながらも、とつとつと語ってくれた。

オセンコさんの話

——私はペリリユーの人です。一九二六年、大正十五年生まれ。まだ戦争が終わらないとき、ペリリユーの人はみんなペリリユーに集まってただけだね。空襲が終わってから、あそこはアメリカの兵隊が上陸したから、仕事がないもなくなって、みんなここ（コロール島）へ仕事をさがしてきたの。働くためにここへきたんだよ。戦争の前はむこうに会社

寿町のおじさんたちもよくいうけど、電車にのるのがいちばんイヤだって。仕事ができ、ちよつと汚れた靴をはいてると、みんながよけるんだって。「それであればないでいられるかよ」って。

——ほんとにそう。きれいでなくちゃイヤなのね。きれいなほうがいい。でも、こんなことをいうと、ブラジルはとていいというところになっちゃう。ブラジルにもよくないところが、いっぱいあるんだから。

とか、たくさんあつたから。そう、日本の会社だつた……。

八歳のときから日本の学校。ペリリユーで本科一年、本科二年、本科三年。そしてコロールへ来て本科四年、五年生まで卒業して、そのほかはもうない。五年間だけ学校。先生は日本の先生。片かなだけ習つたの。それから平がなも少し。日本の子どもたちの学校は、また別だつたね。コロールにきたら、この先生は島の子どもたちにパラオの話はぜんぜん話さない。ここへきたら、パラオの言葉はつかわない。

五年終わつてから、ほかの学校へは行かないの。許さないからね。内地でも行かれない。アメリカの人はいま、ペラウの子どもたちをアメリカまで行かせるよ。

だからそのあとは、十三歳から働くんだよ。うちへ帰つてきて。仕事は——あるのはただメイドだけでしたね。

卒業してうちで働いてるころ、戦争がはじまつた。二十歳くらいだから、わかつてたよ。一九四五年三月の半ばごろにはじまつて、一年もかからなかつた。戦争はパラオには三月にきて、八月に終わったの。

兵隊がペリリユーに大きな建物たててね、

たくらい。

日本の皇民化教育と、突然まきこまれた戦争。その体験を体内深く持っているのは、オセンコさん一人ではない。日本統治時代に生きたパラオ人すべてにいえることだ。三十数年をへだてて、いま軍服ではなくネクタイを締めてやってきた経済大国、日本。オセンコさんたちは、土を、海を、人を殺してはならないと立ち上がった。そして、日本の民衆と手をつないでいこうと、忘れていた日本語を思いだし、かつては行くこともできなかった日本へも足をはこんだ。

その晩も、すぐとりの寄合所で集会がおこなわれていた。

——今日ね、ことし（一九八一年）の七月に日本へ行った人たちの集まりなの。……そう、私たちが広島行つたとき、ほんとうに泣いたんだよ。広島島のミュージアム……ほんとうに泣いたんだよ。かわいそうだよ、向こうの人たち。

私たちが行く前に、大阪の人ここへきたんだ。十名か十一名。そのときロックアイランドへ行つてね、魚と貝ひろつてね。そして、

飛行場のそばに。通信隊、陸軍、海軍、だんだん近くなつたとき、航空隊がペリリユーにきた。その兵隊さん一人ひとりに聞いたんだ。どうして、こんなにたくさん兵隊さんがここに来たの、って。もう空襲が近いから、だからきた、といったよ。

はじまつてから二週間たつたら、ペリリユーの人みんなロックアイランドへ避難して行く。だから私たちロックアイランドへ行つた。そこにひと月いた。そして兵隊たちが私たちのいるところへきてね、本島（バベルタオブ島）あたりへ避難していくといった。だからロックアイランドからバベルタオブへ。私たちはみんな向こうへ行つて、そしてアメリカの人がペリリユーに上陸した。上陸する前に私たちを追いだしたんだよ、日本の人は。だんだんひどくなるからね。ここにいたらみんな死んでしまうから避難しろつて。兵隊は兵隊の船で私たちを本島あたりまで運搬してくれたよ。夜の十一時ごろ、渡つては戻つて、また渡つては……。

戦争が終わつたときにアメリカの人が、この島の人みんな帰つてきてもいいといったから、帰つたんだよ。そのとき向こう行つたら、なんの仕事もない。土地がみんなダメになつ

毎晩ここに集まつて話したよ。日本でね、アメリカの人が広島で落とした原子爆弾——あれよりもひどいものつくつたつて、そう話してるからね。核のゴミを捨てるなんて、このペラウ、ほんともつたいない。この海、この島ぜんぶ、ほんともつたいない。だから、いま、私たちがたかたかつていくんだよ。

私たちは七月に日本行つたんだよ。行つた人は十八人。帰つてきてから、集まりをつくつたよ。私たちは内地へ行つてきたから、内地でいろいろ話を知つたから、見たことも聞いたこともみんなに話してね。そして組になつて、見たこと生かして、みんなで一緒にやるの。

そういうと、オセンコさんは腰をあげた。こんなふうに毎晩、三々五々集まつては、語つたり、歌つたり、勉強したりする。歌は口づたえでひろまり、体験は語りつがれ、いたるところでカンカンガクガクの議論がつづく。一昨年、住民投票のさいに、こういうおぼちやんたちが村々を、家々をまわつて、ミーティングを重ねたという。そのネットワークが、世界はつての非核憲法を成立させるのに、大きな力となつた。

たよ。海だけはいいけど、弾の火薬とか落ちてから、陸の方はあまりね。タビオカとかさつまいも、一回だけ植えたらいいんだけど、二度目はもうできない。まだ空襲のはじまらないころ、畑はよかつたよ。いまはペリリユー、人、ほんとに少ない。たくさん、ここにいるんだよ。ここで子どもを生んでるからね。一九四六年にペリリユーへ戻つて、一九四九年に私のお母さんが死んだの。兄弟はたくさん。七名。私は一番上。

下の弟と妹はまだ小さくて、その子たちを抱く人がいないから、私が抱いたよ。そして弟たちがこの学校はじまつてるから、私がきてね、めんどうをみた。私はそのためにここへきたんだよ。いまは、その弟妹たちがみんな卒業して、働いて、子どもがいて——弟二人はサイバンにいて、ひとりはドクターのしごとしてるよ。妹二人はハワイで、私ひとりだけここにいるの。私の子どもとね。

結婚!? いやあ、だつて、こんなにたくさん弟妹を——子どもはひとり、独身で生んだの。もうその時は、弟妹働いてたから、みんなが学校でるまでめんどうみてくれて、あの子はハワイの大学行つたんだよ。いまはあのストアで働いてる。娘だよ、ちようどあんな

ベンハートさんのげんこつ

ベンハートさんは戦争を知らない世代に属する。だから身ぶりや英語で語りあつた。

パラオの歴史は——と、かれは私の前にゲソツをさした。ずつと昔から、パラオ人はこの島で暮してきました。そこへ四百年ほど前、まずスペイン人がやってきました、と小指を上げる。つぎに薬指を立てて、ドイツの支配。中指を立てて、日本の統治。四番目がアメリカです、と人さし指まで四本ひらいて見せた。そしてこれからは、パラオの人々がこのパラオの主人なんです、とかれはぐいつと親指を突きだした。

その手で網を投げ、魚をつかまえ、調理をするのだろう、大きな手。広げた五本の指で、こんどはそばにある本をつかんで、いう。指一本きりでは本も持てません。包丁もつかえません。さまざまなよい働きは、たがいに助けあつてこそできると思います。だから、世界の国々と対等に、そして仲良くしたいのです。

クリスチャンであるという、ベンハートさんは祈るように手を組んだ。

祈りの手をふたたびげんごつにするとすれば、それは人びとの願いを踏みにじるものに対してである。

完全独立への強い意志、平和の希求といったパラオの人びとの願いが、非核憲法を生み出した。

しかし、パラオの軍事基地化を執拗にねらう米国は、いま、憲法を骨抜き化するフリー・アソシエーション（自由連合協定）の締結を迫っている。財政援助の打ち切りをちらつかせながら。

そして日本政府も、たまる一方の核廃棄物の捨て場として、まだ太平洋をあきらめてはいない。

ケベコールさんのうちで

すずなりの紅い実。パオオリンゴの木に見とれながら、広々とした板の間上がる。文机にもたれているアルフォンソ・ケベコールさん、先客のフミオ・レンギルさんが、「よくいらつしやいましたね」と私たちを歓迎してくれる。昨年十一月に水牛コンサートで紹介された「戦さのはげしかったころ」などの

歌のつくり手、あのケベコールおじさんだ。

——私たちの憲法は、核兵器を認めておりません。そこに立つてやらなければ。憲法にもとづいたフリー・アソシエーションでなければだめです。いま交渉中のもの（パラオの約30%を米軍用地化する協定がふくまれている）はまったくまじいすね。

私自身としては、フリー・アソシエーションというものは、まず完全に自由独立して、本当に自由になつてから結ぶのが望ましいと考えております。

第二次世界大戦のとき、ベリリユーには飛行場があつて、爆弾もたくさんありました。で、アメリカの部隊がたくさん、そこをめぐって行つた。パラオにいた日本兵は、パラオを守るがためにきたんじゃないんです。日本の本土を守るがために、トラックとかサイパンとか基地をつくつて、敵がきた時には本土に着かない前にここでつぶしてしまおうと、そういう考えだつたんだ。いまもそうだね、アメリカは。なぜロシアが、どういうわけで強国がここへくるんです？ そういう危険な品物があるからこそくるんで、ここからロシア本国に持つていく前に、ここでつぶしてしま

おう、という考えじゃないですか。ともかく、前の爆弾の何十倍もある武器がくるんだから、ベリリユーに落とされたらパラオ全島はなくなつてしまいます。

大国は、私がいっても声は届きませんが、いまのところ問題なのは軍備拡張、あれがために問題がおきてると私は思います。本当に平和が望ましいのなら、そんなことは全面的にやめると思いますね、軍備拡張なんか。

——日本の運動も、はつきりいつてパラバラなんです。

——パラオもいまのところそうなんですよ。大きな意見のくいちがいがあつてね。

——悪いほうはすぐくつづくけど。いいほうはむずかしいね。

——そう、いいほうの人たちはなかなか。信頼するまでに骨が折れます。

——だつて向こうは目的が金もうけだから。簡単だから。

——そうです。向こうは金がありさえすればそれでいい。だけど、いまの危機に直面しているのは私たち反対派だけじゃないんです。だれもかれも、おなじ死に下るんだつてことを、知ってもらわなきゃね。愚かな者もいる

んですよ、「なに、死んでも構わんさ。金をもらつて、つかつて、酒飲んで死ねばいい」つて。……本当に悲しいよ。

——日本にいてね、一千万円あつても、昨日ロックアイランドで楽しい思いしたでしょ、あんなこと味わえないのね。もう海は汚くやつてるし、一億あつたつて、きれいな海をかうことなんてできないしね。

——いちばん人間に必要なものはなんですか？ 金ですか？ 私がいったとおり、金は何万ドル持つても、糧がなければ、私はその晩眠れないんですから。ネクタイ締めても、腹がなかつたら眠れませんものね、ちよつと。

——お金は天国まで持つていけないし。

——日本時代に「ルンペン節」つていう歌があつたんだな。

——「ルンペン節」？ 教えて下さい。

青い空から札の束ふつて
五両、十両、百両、千両、
使いきれずに眼が覚めた

ワハハハハハ、まだつづきます。

金がないとてくよくよするな

お金があつても白髪が生える
泣くも笑うも五十年

つていう歌があつたんです。お金持ちにもお墓はひとつ。お金がある人も、私たち乏しい者も、おなじ黄泉に下るんですからね。はたして金は、寿命を伸ばしてくれませんか。金は悪の根。金持ちになるとね、人を見下げたり、人を侮ったり、虐げたりすることにもなります。罪のもとになるよりほかないんだな。

私たちは三食には乏しくない。海の魚はとれるし、畑からも食物をとつてこられます。そして、昔から今まで存続しているパラオの組織というか、ユニオンがあります。助けあいますからね、困らないよ。外国みたいに、物質文明に恵まれて心の貧乏でおられる人とはちがいますね、正直申しますと。

仮にアメリカから援助を八億ドルもらうでしよ。まあ、八億ドルをもらうことに決めたとしても入ってきます。海は破壊され、基地がもうけられ、訓練の雇兵もくる。さまざま悪事がおきてくるし、こんどは八億ドルの金が医療代、甲いの金につかわれることになるん

だ。なぜかつていうと、海から水銀中毒が与えられるし、それから核兵器の放射能にも害がある。八億ドルの金はもう病院に費すよりほかない……なんにもならないね。

結局、パラオに兵隊がいるからこそ敵がくるんです。腐った肉を置かなきゃ、ハエがくるわけないんだ。ハエがたかつてくるのは腐った肉があるからなんです。だからもう、アメリカであろうが、日本であろうが、どこであろうが、もうパラオは絶対、ふたたび軍隊を上陸させてはならないのです。

基地というのは、最初から戦争を背負つてくるんです。それで私はパラオの憲法を支持しています。基地を認めない、核兵器の持ち込みを認めない——これは本当に、われわれのいま、そして将来、子ども、孫、ひ孫のためになるんですから。

他人の物語と自分の物語

津野海太郎

江藤淳の『落葉の掃き寄せ』という本を読んでみたら、戦後の日本人は自分の物語を発見することを忘れ、他人がかいた物語のなかで便々と生きつづけてきた、とかいてあった。「なぜ日本人は、……日本側の立場に準拠して、あの戦争についての物語を語ろうとしてはいけないのだろうか。それは日本が三十四年前に敗北したからだろうか。敗北した国の国民は、戦勝国の最高司令官や大統領の手前味噌を、永久におうむのように繰り返しつつづけなければならないのだろうか」というのである。昨年十一月にでたこの本はまだ売れつづけているらしく、いまでも本屋の平台に何冊もつまったままになっている。

日本人が「日本側の立場に準拠して」かた

る「あの戦争についての物語」とは、いったいどのようなものなのか。たとえばそれはつぎのような物語をもふくむのだろうか。もと水上憲兵分隊の憲兵曹長だった藤本文夫という人物が、読売新聞社からでた『昭和史の天皇』第十卷(一九七〇)のなかで、かれの戦争をこんなふうにものがたつていて。

一九四二年の春、日本軍がマニラに進駐した直後から、マハリカ(ビサヤ語で勝利の意味)というタイトルの反日宣伝ビラがさかんにまかれるようになった。そこには「日本人はフィリピン人を侮蔑してビンタをはる」とか、「たよるべきは侵略者日本ではなくアメリカである」といった文句がしるされていた。マッカーサーの「アイ・シャル・リターン」

宣言も、はじめはこのマハリカ通信によってひろまつたらしい。憲兵隊はただちに調査を開始した。ビラの文字がタイプで打たれていたことから、まず市役所のタイピスト、つぎにチャベスという印刷業者が網にかかった。そしてかれの自供によって、弁護士や実業家など、おおぜいのマニラの実力者たちが芋づる式に検挙される。かれらはマルキンというゲリラ隊長とひそかに連絡をとり、反日宣伝をおこなっていたのである。

……チャベス情報で出てきたもう一人の人物は(と藤村もと憲兵曹長はかたる)、レオポルド・サルセドという俳優でした。これは日本でいえば、さしあたり長谷川一夫

クラスの有名な役者ですが、占領後、日本がフィリピン向けの宣撫映画をつくったとき、彼はゲリラ役をやり、迫真の演技だと評判になった。迫真のはずで、実際のゲリラだったのです。

彼をつかまえたのは、どこかの劇場で実演をしていたときですが、わたしは一人で楽屋へ行き、自分も日本の役者の卵だといひ、話をしたいからといったら、舞台が終わってから気軽にきてくれた。まあ、あのころは日本人というだけで幅のきく時代でしたからね。そのまま憲兵隊へ連行しました。そのころは留置場はいっぱい。はいり切れないのは両手両足をしばって、廊下でころがしてあったのですが、それをみたたん、サルセドは黙って両手をそろえてわたしの前にさし出しました。それで、

「お前はしばらくぬ」「なぜか?」「逃げないとわかつている」といったものです。彼は仲間の女優を日本の高官に近づけさせ、上層部の情報をさぐっていたと自供しました。

こうしてマハリカ捜査は六カ月ほど落着

するのだが、ゲリラ隊長のマルキンは最後までつかまらなかつた。「マルキン・ゲリラはルソン島を主体にしたゲリラで、東海岸の分水嶺をなしているシエラ・マドレ山脈に潜伏し、ウワサでは部下三十万人とかで、アメリカの潜水艦に物資の補給をしていたそうです。もとは米比軍の将校とか。年は、いまも生きていますとすれば七〇代でしょうね」と、もと憲兵曹長はかれの物語をかたりおえる。

これが「日本側の立場に準拠して」かたられたマルキン・ゲリラの物語である。ところでレオポルド・サルセドという俳優については、これとはまったく別の物語がある。『水牛』新聞のころからの読者なら、その第三号に掲載された、日本軍占領下のマニラにおける抵抗運動にかんする寺見元恵さんの文章をおもいだしてくれるかもしれない。あそこはこのサルセドが登場していたのだ。おそらくはおなじ一九四二年、占領軍報道部があるフィリピン人劇団に、小国英雄がかいた「夜明け」という宣撫劇を上演しろという命令をくだした。それは「一抗日ゲリラが日本兵にやさしくさとされ、いままでの無知を反省し、大東亜共栄に協力する」という筋だての芝居だった。

……これをそのまま上演することは、劇団の監督L・アヴェリヤーナ氏にとつては耐えられないことであつた。いろいろ考えた末、改心するゲリラに当時もつとも人気があつたL・サルセド氏を起用した。彼が舞台上に現われるとやんやの喝采がわき、かれはその熱っぽさにつられ、つい、

「アメリカ軍はかならず帰ってくる。けつしてわれわれを見捨てはしない」と口走ってしまった。

「いい役者というものは与えられた役に身も心も打ちこむもんで、つい抗日ゲリラの身になつたつもりで……」

というサルセド氏の弁解や、

「べつに抗日ゲリラに人気があつたわけじゃない、サルセドに人気があるんです」というアヴェリヤーナ監督のいいわけ、

検閲官はすぐ別の俳優を抗日ゲリラ役に、サルセド氏を日本兵役に仕立てたところ、やはり抗日ゲリラの方に拍手が湧いた。そこでこの劇はすぐさま中止。サルセド氏は例のアドリブがたたつて、十三日間、フォート・サンチャゴに身柄を拘束された。

寺見さんによれば、サルセドは抗日ゲリラの輸送係で、とくに食糧と医薬品の確保にあたっていたとのことである。

こんちのフィリピンでは日本占領下の抵抗運動についての関係がさかんにおこなわれているらしく、その研究が寺見さんのノートを背後からささえているのだろう。彼女はまた、トゴとブゴという二人組のコメディアンが演じて、当時のマニラの人びとにたいへん人気のあるギャグのひとつを紹介している。「ぼくが何国人が、あててみな」といって、トゴがシャツの袖をまくりあげると、両腕に腕時計が何十個もはめられている。そこでブゴが「わかった、日本人だ」というと、すかさず客席に大爆笑がおこったというのである。この時計ギャグはいままだ生命力をもちつづけているらしい。昨秋、マニエル・パンビットという若い劇作家が日本にやってきた。やはり有名なコメディアンを主人公にした『カナプリン』というかれの芝居にも、占領下の劇場のシーンがでてくる。そして、そこでもコメディアンは腕に日本製の腕時計をたくさんはめていて、憲兵がはいつてくると、それを派手にしめしながら日本の科学技術をほめたたえ、憲兵がいなくなると、こんどは

時計にしばられた融通のきかない日本人たちをさんざんにからかうのである。そこではおそらくかつての軍服の日本人に、現在の背広の日本人のすがたが二重焼きされて示されているのにながいない。

ここで注意しておかなくてはならないのは、最近の研究では、十年ほど前までは一般的だった侵略者ニッポンにたいする解放者アメリカという図式がうすれ、アメリカの自己中心的なフィリピン政策への批判がよく押しだされるようになってきているという点であろう。その皮切りとなったのはレナート・コンスタンティノの一連の著作である。かれは『フィリピン民衆の歴史』第三巻のなかで、例のマルキン・ゲリラについてもふれ、かなりきびしい評価をくだしている。コンスタンティノによれば、マルキンの指導者もも米比軍の運転手マルコス・アグスティンで、バタインの戦闘にたどりつけないまま日本軍につかまり、逃走後、一九四二年四月に中部ルンでゲリラ部隊を組織したという。だが、かれの関心はもっぱらマッカーサー元帥による公認ゲリラとなることにあり、そのため同地域で活動していたハンタース・ゲリラとはげしい武闘をくりかえす。「かれらは日本軍と

のたたかいよりも、相互の競争によりよく執着していたかに見える」とコンスタンティノはしるしている。

「他のアジア諸国の抵抗運動とちがって、フィリピン人の抵抗は、ほとんど完全といえるほどに、米軍作戦の必要性、さらには太平洋地域で指揮をとるダグラス・マッカーサー將軍の指令に屈従するものであった。こうした事実関係は、その後ながく余波をのこすことになる。占領下の抵抗運動の性格や行動様式に影響を与えるだけではなく、戦後の社会とその意識にも傷跡をのこしたのである」

ゲリラの指導者たちがマッカーサーの公認をあらそったのは、日本占領軍に協力した旧体制の指導者たちにかわって、戦後のフィリピン社会でアメリカの庇護のもとに権力をにぎるためだった。戦争がおわるやいなや、共産党系のゲリラ組織フク団は弾圧され、日本帝國主義から解放されたフィリピンは、こんどはアメリカ帝國主義の柵のなかによるこんど戻ってしまった。せつかくの機会がこうしてむなしく失われたというのがコンスタンティノの意見である。当然、この観点からすれば、たとえば「たよるべきは侵略者日本ではなくアメリカである」といったマハリカ通

信のアジテーションや、「アメリカ軍はかならず帰ってくる」というサルセドのアドリブは、フィリピン人民の抵抗の伝統と同時に、アメリカへの恭順の意志をもあわせて表明するという両義的な意味をもっていたことになる。そのようにしてコンスタンティノは、アメリカによりそってつくられた古い物語を洗いなおし、あらためて「フィリピン人の立場に準拠した」物語をかたりはじめるのである。

とすると、このコンスタンティノと、いまこそ日本人は自分自身の物語を自信をもってかたりはじめるべきであると主張する江藤淳とのあいだには、なんらかの共通点が存在するということになるのだろうか。戦後、マッカーサーはその本拠地をマニラから東京にうつした。そして江藤は、まさしくそのマッカーサーによる「他人の物語」の押しつけにたいして、おくればせながら抗議の意を表明しているのだから。

江藤ははじめにふれた『落葉の掃き寄せ』という本のなかで、占領軍がワシントンにもちかえった大量の資料にもとづいて、かれのことばをつかっている。戦後の日本文学に刻印された占領軍の検閲のケース・スタディ

をおこなっている。河盛好蔵の「静かなる空」や竹山道雄の「ハイド氏の裁き」といったエッセイは、それらが占領批判の意図をもつという理由によって雑誌掲載を禁じられた。吉田満の『戦艦大和』や柳田国男の『氏神と氏子』も、検閲の眼をくらすための改稿や削除処分によって、こんにちにはいたるまで、当初のものとはまったく異質のかたちで読まれている。したがって「戦後の日本文学に原点がある」とすれば、それはこの汚辱と抑圧のなかにしかなく、それ以外の解釈はすべて自己偽瞞と、幻想の上にあぐらをかいた自己満足にすぎない——その汚辱を解放ととりちがえたこと、もしくは意図的にそうしたことによって、戦後の日本文学は占領軍の意図どおり「民族の記憶」を忘れてしまった。こうした習性をたちきり、いまこそ日本人は自分の物語を、「真の意味で自由に」語りださなくてはならないと江藤は主張する。

民族の精神的自立をうながす江藤のことばは、それだけをとりだしてみれば、たしかにコンスタンティノのそれに似ていないこともない。しかし、いま私がこの文章であつかっていることがらに即していえば、かれは日本がアメリカに占領される直前まで、コンスタ

ンティノの国フィリピンを占領し、フィリピン人の「民族の記憶」をたちきろうと、いっそう暴力的な弾圧をおこなっていた事実をすっかり忘れてしまっている。あるいは忘れてしまったふりをしている。自分の物語をとりもどすために、「戦勝国の最高司令官」が押しつけた物語を拒むのはいい。だが、かつて自分たちが暴力的に支配し、自分の物語を強要してきた他人たち——いわば「敗戦国の民衆」がようやくかたりはじめたかれらの物語をも、江藤は、あくまでも自分たちには関係のない他人の物語として拒もうとするのだろうか。そうやってまで回復されなければならぬ自分の物語とは、いったいどんな物語なのか。それは藤本もと憲兵曹長の物語のようなものをもふくむのだろうか。

江藤の本を読んでふしぎに思ったことがひとつある。それは戦後の日本で、かれが賞揚するような文学者たちが占領軍の検閲に、従順に、ほぼ全面的に屈服し、たとえば日本占領下のフィリピンにおける抵抗運動のようなものを組織しようなどとは、まったく考えてもいなかったらしいということだ。どうしてかれらは占領軍によって抹殺された自分の作品をガリ版で印刷し、それをひそかに全国に配布

しなかったのだろうか。かりにそうした地下出版の運動かなにかが現実組織されていたら、江藤の主張ももうちよつとすつきりしたものになりえたであろうに。

私の考えでは、かれらはアメリカ占領軍の権力に押しひじがれる以前に、すでに日本の国家権力によってコナゴナに背骨を叩き割られてしまっていたのである。たとえばフィリピンを例にとってみれば、そこでは一九四二年以来、石坂洋次郎、尾崎士郎、火野葦兵、今日出海、三水清、三宅艶子といった文学者たちが宣伝班を組織し、新聞、ラジオ、演劇、映画の検閲、宣撫劇の上演、日本語教育などの活動をおこなっていた。『夜明け』の作者、小国英雄は、黒沢明の片腕ともいうべき有名なシナリオライターである。江藤があげている人びとをふくめて、日本の文学者たちのおおくが日本国家の圧力のもとで、他民族の文化的支配の最前線にたたき立てられていたのだ。因果応報。こんどは自分が占領軍によって検閲される側にたち、古傷をかかえて、とてもかれらには抵抗運動にまで走る気力はなかつただろう。他人の物語ぬきで、そうそう都合よく自分の物語をつくれるものではない。

編集後記

モトムラさんは日本語があまりうまくない。言葉がでなくなると、アとかウとかいいながら、でも眼をピカピカさせて、いいたいことを元氣よくいいきってしまう。

話がもりあがってくると、たとえばスラムの子供劇のところなどでは、やにわに喫茶店のいすからたちあがり、手をふりまわし、テーブルをバーンとたたいたりする。ひっそりと話しこんでいた恋人や商人たちが、びつくりしてこちらをみる。私もつられて大声になる。たいへん気持ちがいい。

日本では貧乏な人たちに自分の文化がない。だから暗い。おまけに街中が、さあ、あれも買え、これも買いなさいと責めたててくるので、私にはここはとてども住みにくい、と彼女はいう。

おもしろいもようのシャツを着ていたので、「ブラジル製？」ときいたら「ちがう、カワサキで買ったの」と答えた。エリもとに、「メイド・イン・コリア」という文字があった。彼女はブラジル人だった。「この日本人とは別の日本人」だった。

購読の御案内

*本誌は書店にはおきません。毎号確実に入手されるためには編集部あて予約購読の申し込みをしてください。発刊と同時に直送します。

*申し込みと送金は郵便振替(口座名 水牛編集委員会、口座番号東京四一九一七九二)または現金書留でお願いします。住所、氏名、電話番号、何号からということを明記してください。

*購読料は送料とも一年分三〇〇〇円、半年分一八〇〇円です。

水牛通信

第四巻第三号

一九八二年三月十日

定価 二〇〇円

発行人 堀田正彦

発行所 水牛編集委員会

〒154東京都世田谷区新町2-15-3

八巻方

電話〇三(四二五)九六五八

振替口座東京四一九一七九二

印刷所 (株)トライプリントシヨツプ